

第五章 恋と友情



## ■ 恋人との出会い

恋人との運命的な出会いは、由希子が名古屋第一赤十字病院に再入院した九一年秋にさかのぼる。

完成したばかりの骨髄移植センターへ再入院となったのは九月十日だったが、無菌病棟を経て一般病棟に移った翌十四日に、留学組の牧野亜紀子が見舞いにやってきた。横に男が二人いる。亜紀子が連れてきたボーイフレンドは顔見知りだったが、もう一人のやけに色が黒い男は初対面である。

「彼も同じ寮生なんだけど、これから食事に行くので、病院にも連れて来たわ」

色黒の彼は、光ヶ丘女子高校の近くにある東海医療専門学校<sup>ひかりが丘</sup>の二年生で、学校の先輩である亜紀子のボーイフレンドについて来ていたのだ。

「ぼく、暇だったし、食事をおごってくれるというもんだから」

ぼそっと語る口元の歯が、真っ白だった。顔が黒いのは、夏休みに建設工事などのアルバイトで日焼けをしたからと言ったが、由希子がおしゃべりな分、それだけ聞き出すにもずいぶん時間がかかった。白血病だというと、彼はびっくりしていた。

「土田茂隆といます」

ずいぶん古くさい名前だと思ったが、身長は驚くほど高い。一八七センチだという。放射線技師になるための勉強をつづけている茂隆には、女友達がいらないらしい。だが、茂隆を含めた三人は、由希子の内心にはまるで気づかなかった。

由希子の気持ちは揺れた。その日の日記は短かった。

《初めて会った時から、違うもの感じてた。自分の中の誰かが心をつづいてた。友達には上手く言えない、このパワーの源を。恋をしてる、ただそれだけじゃ済まされないことのような気がする。きつと、そうなんだ。めぐり会ったんだ、ずっと探してた人に。まぶかにしてた帽子のつばを、フツとあげたい気分》

そんな気持ちを知りようもない茂隆は、その後ちつとも顔を見せなかった。初めのうち、由希子は不満に感じていたが、やがて髪の毛が目立って抜け始めてから、かえって来てくれないほうがいいと思うようになっていた。

なにしろ、一度に「ゴッソリ」という表現がピツタリするほどの抜けようで、嘆いている間がないくらい、自慢の長い髪の毛がすべて抜け落ちてしまったのである。脱毛は一回目の入院ではほとんどなかっただけに、由希子の落ち込み方は激しかった。

しかし、いつまでもこたわってはいられない。入院したときから、周りの患者の姿

を見ていれば、やがて我が身にも起きることはわかっていた。

ようやく外泊が許されたのは十二月十三日だった。磯和夫に紹介されて、大谷貴子と初めて会った日である。母に買ってもらったカッラを初めてつけた。

十五日の夕方までに帰ってくればいい。帰宅してすぐ、牧野亜紀子から電話がかかってきた。翌日が亜紀子の誕生日なのだ。その打ち合わせがあるのか、男友達に会うため、専門学校寮へ行くという。由希子も、かすかな期待を込めて一緒にいついていった。

亜紀子が運転していった車から降りようとしたら、茂隆がひよいと顔を見せた。

「やあ、久しぶり」

背の高さと真っ白な歯を強烈に覚えている由希子は、あまりの変貌ぶりにびっくりした。髪は伸び、顔はすっかり色白になっている。

「あの子、すっごいカッコよくなったね」

期待どおりになって内心はうれしくて仕方ないのだが、茂隆に何を言っているかわからない。彼はすぐ寮の中に入ってしまったから、何も言えずに帰宅した。亜紀子くらは気がついてくれればいいのに……。

### ■クリスマスと成人式

十二月二十三日に、また外泊許可が出た。由希子の強い要求に、体調もそう悪くはなかったから、病院も了承したのである。

クリスマスも、病院のベッドで過ごすなんて、とても耐えられない。せつかくいい男もあらわれてきたことだし……。

二十歳になって、まだ一カ月あまりしかたっていない由希子は遊びたくて仕方がない。その日にすぐ岡崎へ戻り、牧野亜紀子と連絡をとった。市内の目抜き通りで買い物をして、それから食事をしようということになった。

「土田君も一緒に呼べないかなあ」

亜紀子が男友達を誘うと聞いた由希子は、積極的に提案した。

「いいわよ」

答えたものの、亜紀子にはちよっぴり複雑な気持ちがあった。由希子が茂隆の名前を挙げるとは、全くの予想外だったからだ。

ともあれ、二組のカップルは岡崎市内で買い物を買ませ、レストランで夕食を囲んだ。呼ばれた茂隆は、暇つぶしに付き合わされたのだろうと思っていった。この日もす

ぐに別れたのだが、去りぎわに由希子はさりげなく尋ねた。

「あしたは、時間あいてる？」

茂隆の実家が十分で、正月には帰省することを食事中の会話で聞き出していた。冬休みに入っていたけれど、恋人もいない茂隆は、帰省するまで学校の寮で寂しく過ごすしかないらしい。茂隆は内心で「わざわざ『時間あいてるの?』なんて聞くのは、当てつけがましいじゃないか」と不満だった。

翌日、由希子は寮へ電話をかけた。公衆電話は茂隆の自室に最も近いところにあるから、寮生にかかってくる電話は茂隆が取り次ぐことが多い。いきなり目指す本人が出てきて、由希子のほうがびっくりした。

「二十五日に、うちでクリスマスパーティーを開くの。よかったら来ない？」

そうか、時間があいてるかどうか聞いたのは、そのためだったのかと、茂隆にはやっと納得がいった。

「これから、そっちへ行っていい？」

茂隆には別にことわる理由がない。ほどなくしてやってきた由希子と、寮の自室で夕方まで過ごした。由希子はよくしゃべった。病気であることは、茂隆ももう知っているから、この日は芸能関係の話題が中心である。

「わたしのこと、どう思ってる？」

話題がとぎれたのを見計らって、真顔で茂隆に尋ねた。

「どうって、いきなり聞かれても……」

返答に窮した茂隆は、この日ははっきりと答えてくれなかった。

実は由希子は、午前中に母と口喧嘩をして家を出たままだった。心配しているだろうなと思いつつも、素直になれない。このまま帰れば、どこに行っていたのかと根掘り葉掘り聞かれるにちがいない。思案の末、電話を入れた。

「香里とずっと話しこんじゃってさ、これから帰るから」

家族ぐるみの付き合いをしている玉谷香里をダシに使ったのだ。受話器を置いてすぐ、もし香里がいなかったらどうしよう不安になった。幸い自宅にいてくれて助かった。香里には、寮まで迎えにきてもらった。

「お願い、ずっと香里と一緒にいたことにして」

車の中で懇願した。一人暮らしの男性の部屋に、由希子が長時間いたと知れば、母はきっと怒りだすだろう。怒られるようなことは何もなかったにもかかわらず、なぜか由希子はうしろめたさを覚えていた。いずれは、何かあるにちがいないと感じていたのかもしれない。

その半面で、茂隆を自宅へ呼ぶには、ためらいが全くなかった。友達を自宅へ連れてくる分には、母は非常に寛大だったからである。

クリスマス当日の二十五日、若者たちだけのパーティーを新装の自宅で開いた。両親は出かけていたが、クリスマスプレゼントだけは、来客の分まで用意してくれていた。

恋の対象を得たものの、由希子が病気であることには変わりない。しばらくつけていなかった日記が、九二年元日に復活した。

《新年です。もう病気になって1年以上が過ぎてしまった。私はいつまで生きられるの？ 私には磯さんの死はショックが大きかった。何だか現実の厳しさをみた気がした。どうしていい人ばかり死んでしまうの？ 私はいい人じゃないから死なないかな。神様は私なんかいらさないでしょ。お願いだから、まだこの世界に生きさせて。まだまだやりたいこといっぱいあるし、生きる、生きさせてもらってる有難さも十分分かってるから、この先、絶対死にたいなんて思わず、強く生きていくから。ハチもコロも私の身代わりのように死んでいった。死んだら会える人もいるけど、会いたい人もいるけど、私は

生きたい。その人たちの分まで生きるから、絶対。新年早々、死について考えて、いつも死と隣り合わせなのは少し辛い。でも、誰でもいつ死ぬかなんて分からないし、運命もあるだろうし、でも運命が自分の思いどおりになることがあったら、人生なんてつまらないのかも知れない》(92年1月1日)

一人きりでいると、ついついネガティブな考え方になってしまふ、これではいけない。二日に目抜き通りへ出かけて、毛糸を買ってきた。セーターを編むためだ。

《帰って来てから編み物に取りかかった。セーターなんてまともに編んだためしがないけど、気合は十分だ。出来上がるかどうか心配。でも、バレンタインデーまでには、どうにかなるように頑張ろう》(1月2日の日記)

贈る相手は決まっていた。骨髄移植推進財団の啓発ビデオの収録がおこなわれたとき、編んでいる最中だったのが、このセーターである。

三日には茂隆が、帰省先の大分から長距離電話をかけてきてくれて大満足だった。四日に病院へ戻った。ついこのあいだまでの入院中は、いったい何をやってきたのかと思えるほど、新年になっての病院生活は充実感にあふれていた。

《編み物の前身ごろの終わりになったころ、大きすぎに気づき、初めからやり直し。うーん、辛い。今日は一日中、朝から夜まで御飯を食べる以外、ず

うっと編み物をしていた》(一月5日の日記)

《後ろ身ごろ完成!!……すごい苦労したのに絶対サイズが小さい。やつぱりちゃんと計らないとダメみたい。明日来たら計ろう。もうすぐ退院できそう。ヤツタ。もう四カ月だもんね。早く退院して、家で御飯作る練習したりしたいし、皆とパーッとやりたいよ》(一月6日)

寸法を測る相手の茂隆は、七日夕刻に病室へやってきた。ひとりで病院に顔を見せるのは初めてだったから、看護婦たちが集まってきた。

「これが、うわさの彼なの?」

そんな言い方をしたら、いつも話題にしているみたいで恥ずかしいじゃないの。文句を言いたかったが、茂隆にはまだ遠慮のある時期だ。そうは言えないところがつらい。それより、この日はうれしい知らせがあつて、それを真つ先に茂隆に伝えることができたのがうれしい。

「退院が決まったの。十三日よ」

「じゃあ、成人式には出られるんだ」

一生に一度しかない成人式に出られるかどうか、そのころの由希子の最大の心配事であつた。高校の友達にはよく会うが、小学校、中学校時代の友達はどうしても疎

遠になっている。そうしたみんなに久しぶりに、確実に会えるのが成人式である。

それ以上に由希子を有頂天にさせたのは、茂隆がエスコートしてあげるといつてくれたことだ。この年ごろ、相手がいるかいないかで、周囲の見る目が違う。少なくとも由希子や由希子の友人たちはそう思い込んでいた。

例年、岡崎市の成人式は、由希子が高校卒業まで過ごした自宅すぐ横の、六名体育館で開催されていたが、この年から新装成った中央公園総合体育館でおこなわれた。

五千六百人あまりの新成人のうち、四千人以上が集まってきたが、背丈が一八七センチの茂隆は、成人式会場でもひととき目立つ。付き添いのない幼なじみを横目に、由希子はルンルン気分であつた。

「このあいだの話だけど……」

クリスマスイブのとき、由希子がどう思っているのかと聞いたのに対する返事を、茂隆がしたのは、成人式から一週間目のことだった。

「ぼくも同じ気持ちだから、ぼくでもよかったら」

由希子の交際申し込みに、茂隆がこたえたのである。

## ■寮に入り浸り

成人式を終えたあとの由希子は、入院中の憂さを晴らすように、友人たちとカラオケやボウリングに興じていた。

茂隆から便箋がプレゼントされた。手紙のほうか意志をしつかりと伝えられるからだという。書くことは由希子も嫌いではない。

《今日、一週間ぶりに会ったね。いつも電話してるけど、やっぱり会うのが一番!!》と思いました。会うと、やっぱり好きなんだなあって実感しちゃう。こんなこと手紙でしか言えない。こうして手紙を書いて一人で照れているおちやめな私。

ちよつと暗い話になっちゃうけど、病人だからと言って好きな人がいるのはいけないことじゃないよね。ずっと考えてたんだけど、自分が好きになった人が自分のことも好きになってくれるってことは本当に幸せなこと。きつと病気の代わりに、こんな素敵なことを神様がプレゼントしてくれたんだ、と勝手に解釈することに決めました。でも実際、これから茂隆くんに重荷とってしまいかも知れないという不安を抱いているけど、そうだった時はそ

の時考えようと思っています。今はどれくらい続くか分からないこの幸せを大切にしたいな》

茂隆の寮の自室を頻繁に訪れるようになったのは、二月に入ってからである。ある日は、夜の十一時までずっと部屋にいた。母の知香子に叱られたのは茂隆だ。

「いくら成人式が済んだからって、由希子は病人なんですから、少しは考えてやってくださいよ」

しよげ返る茂隆を見て、知香子は少し強く言いすぎたかと思った。病気なのに付き合ってくれる相手に、本当は感謝しているのだ。

実は、その日、由希子はまっすぐ帰宅したくないくらい強いショックを受けていた。病院へ行ったら、仲のよかった闘病仲間が亡くなっていたのだ。母もよく知っている患者だったから、そのまま帰宅したら泣き崩れてしまうにちがいないと思った。そんな顔を見せたくないで、茂隆の部屋ですつと過ごしていたのである。

茂隆は素直に知香子に謝った。

この一件がかえってよかったようで、それからは茂隆も由希子の家をしよつちゆう訪れては、食事を一緒に楽しむようにもなった。それ以来、母は料理を多めにつくって、由希子が寮まで持っていくことも増えていく。

このころから、由希子は茂隆のことを「しーくん」と呼ぶようになった。「しげたか、って、なんだか若者っぽくないじゃない。しーくんならいいな」勝手に決めて、すぐそう呼び始めた。本当は自分だけの呼び方にしたかった。でも、だれにでも「しーくんがね」と言うものだから、家族ばかりか会う人すべてが、しーくんと言うようになってしまったのだ。

おしゃべり好きの由希子と、もともと寡黙な茂隆が一つの部屋に居るのは、何だか妙な雰囲気だった。茂隆が勉強をしているかたわらで、由希子が雑誌を読んだりしていることもけっこうあった。

勉強の合間をぬって、茂隆がHLA検査を受けてくれた。由希子の自宅で食事をとっているとき、HLAが適合しやすい条件の一つに地域性があると知った茂隆が、自ら言いだったのである。

「ばくもお父さんと同じ大分県生まれだから、ひよっとして……」  
結果は残念だったが、茂隆の気持ちがあれしかった。

病人としてではなく、同じ年の普通の女の子として扱ってくれるところに好感をもっていた由希子だったが、茂隆が病気にまつて核心を突いてきたのが二月末のことだ

った。

「病氣のこと、もっと知りたいんだ」

二人のあいだは、まだ確実な「恋」に至ってはいなかった。そこへ向かって進んでいたことは確かだが、そうなれば、できるだけ相手のことを詳しく知りたい。世の男女と同じことを茂隆は口にしたに過ぎない。

由希子はちよつと違っていた。できれば、病氣のことには触れないままでいたい。病氣が避けられないのなら、少なくとも愛する人の前でだけは忘れていたい。

一度は「病氣のことを話すわ」と告げた。東京でのシンポジウムに参加してみても、少しは力を得た気がしたからだ。しかし、テレビや財団の啓発ビデオに出演したとはいえ、骨髄バンク運動が十分に分かっていたわけでもない。

愛する人に、病氣のすべてを語るにはためらいがある……。

「やっぱり言えないわ」

教えてくれ、いや駄目よの押し問答をしているうちに、つい喧嘩になってしまった。おしゃべりな由希子も、こと病氣のことになると、口ごもらざるを得ない。でも、文字にすれば割合正直に言える。こんなとき、手紙は便利だった。

《話せば楽になるんだつたら話すけど、きつと、絶対、余計心配になって、



私と付き合っている事に疑問を感じて来ると思う。もしかしたら、もう既に感じているかも知れないけど……。話せば頼る所が出来る、でも甘えん坊である私はズルズル甘えて、自分自身を見失う事になってしまいかも知れない。そして別れた時には行き場が無くなって、物凄く辛い思いをすることになると思う。人間って確かに弱いかも知れない、だから強くならないといけないと思う。

私が一生懸命生きて悔しさを残して死ぬより、いい加減に生きて仕方ないわ、と思って死んだほうがいいと言っているのは本心だと思う？ 口に出すことで自分に言い聞かせているの。本当はたった20歳でそれも幸せなのになぜ苦しまないといけないの!?! って思っているの。だけど、そう考えてばかりいても何がどうなるの。泣いて治る訳じゃないし、そんなこと考えてばかりいたら神経がおかしくなる。だから私は、病気で苦しんでいる代わりに、20歳の普通の女の子が持っている幸せは与えましようって、神様が考えてくれたのになんて思っただけ、病気の事を受け止めてる。本当は病気でなければどんなにいいかって、どの位、どれ程思っていることか……。でも、そんなこと言っただけで嘆いていても、現実からは逃げられない。たとえ私があと1年の命だ

ったとしても、私にはこのまま普通に生活する事が一番幸せな事だと思っただけ、まだ死ぬって決まっている訳じゃない。先の事なんて誰にも分からない。

私の希望は、病気であるという事はもう避けては通れないけれど、ただ20歳の普通の子で少し体が弱い……と思っただけ貫えれば一番嬉しい。私の病気に振り回されて、そしていろいろと心配をかけていて本当にごめんね。ただ絶対治すから。

このままだと何だか病気のせいで壊れてしまいうで怖い。だけど本当は普通の子と同じように生きたいと強く、強く望んでいて、そして実は希望を捨てていないということだけは分かっていた。(3月1日)

由希子の恐れは、全くの杞憂であった。茂隆が目指しているのは放射線技師である。患者を扱う職業に就く以上、由希子の病気も真正面からとらえようとしていたのだ。由希子の本心を十分にわかってくれた。

それまで、どちらかといえば由希子の積極性に、茂隆のほうが押され気味であった。喧嘩を経て本心を文字で明かされてみて、茂隆の恋ごころも高まっていた。

### ■初めての旅行と大谷貴子の助言

飛驒<sup>ひだ</sup>高山への旅行を楽しんだのは三月二十四日のことだった。大岩久美と恋人のカップルと、四人の旅だ。

たびたびの旅行は無理だろうと、初めは一泊を予定したのだが、久美の家族が反対して日帰りとなった。このときのビデオが、テレビの十五秒スポットCMに利用されることになる。

高山は、日陰にまだ雪が残っていた。

到着しすぎ、四人は町並みをぶらぶら歩いて見物したが、途中で別行動となった。それからは由希子は見物そのので、買い物に神経を集中した。仲のよい友達へのお土産をどっさり買い込んだのだ。由希子自身も袋を持ったが、茂隆も紙袋を持たされた。

再び合流して、高山の町を見下ろす小高い場所へ行くことにした。道すがら、ウサギが飼われているのを見た。

「あつ、ハチだ」

種類こそ違うものの、前年の初夏に死んだハチが思い出されてならない。ハチとコ

ロが身代わりになってくれたおかげで、こうして恋人もできたし、その恋人と元気に旅行しているのよと、由希子は心のなかで感謝した。

カメラの裏蓋を開けてしまったのは、高校卒業旅行で神戸に行ったとき以来だった。

「オッチョコチョイのゆきこね」

自分で先に言ってしまったから笑った。

帰りの電車の中では、疲れてはいたけれど、しゃべりどおしだった。

「病気が治ったら、F1のレースクイーンになってやるの」

留学したころは、空港のグラウンドホステスが希望だったが、病気を経験してみると、もう少し派手な生き方をしてほしいと思っている。

「だって、かっこいいじゃん」

そんなことを楽しそうに語る由希子を、久美が初めて扱う8ミリビデオでとらえた。ふだんから、よく笑う由希子だったが、このときの映像に登場する由希子の表情は、家族もお目にかかったことのない、屈託のない笑顔であった。

四月四日には、岡崎公園へ花見に行った。テレビ局の取材があったので、大谷貴子もやってきた。貴子と茂隆は、この日が初対面である。

岡崎城を中心にした公園一帯の桜は満開であった。取材を終えて、貴子が茂隆に語りかけた。

「由希ちゃんとは、病気だからとかじゃなくて、普通に付き合っただけでね」

「わかっているんですけど、由希子は、病気のこと何も言ってくれないんですよ」

「普通に付き合いたいから、心配かけたくないんじゃないかな」

茂隆にも、それはわかっているといった表情である。

「病気のことわたしに任せなさい。しくんがいるから由希ちゃんの心の支えになっ

っているんだし、それだけは覚えておいといてね」

やはり、貴子のほうがよくしゃべる。

「何かのときに別れることがあって、理由がほかに好きな人ができたとか、性格が嫌いになったっていうなら、仕方ないと思うのよ。それはほかの恋愛でだって、いくらでもあることだもの。でも、病気が原因でっていうのは悲しすぎるから、それだけはなしにしてね」

その後、貴子が茂隆と話す機会はほとんどないのだが、貴子の心配は無用だった。このころには「好きで好きで」という気分、茂隆はなっていたのである。

帰り際、由希子はポツリとつぶやいた。

「来年も、きつとお花見ができるよね、ね？」

二人っきりの旅行は五月三日の京都だった。これも日帰りなのだが、よく晴れた日で、まずは銀閣寺をスタートして哲学の道を歩いた。そのあと三十三間堂、清水寺、八坂神社をめぐった。

かなり歩いたせいか疲れが出てしまい、夕方からは京都タワーに上ったりしてから、最終の新幹線で帰ってきた。着いてすぐは、京都に住んでいる留学仲間が来てくれたが、ほとんどは茂隆とのカプル旅行といえるだけに、気分は楽しかった。

五月七日は茂隆の誕生日だ。寮の自室でパーティーが開かれた。招かれた牧野亜紀子が久し振りに訪れてびっくりした。以前、ボーイフレンドと一緒にきたときは、殺風景そのものの四畳半だった。目立つ物といえば、せいぜいスキーと登山靴くらいしかない。それが、まるで女の子の部屋のように模様替えしていたのである。

「みんな、わたしがやったのよ」

由希子は誇らしげに宣言した。カーテンやテーブルクロスなど、すべて由希子の手作りなのだ。亜紀子がさらにびっくりしたのは、由希子が手料理を作っているのを知ったからである。

「人に料理をつくるなんて、中坩らしくないじゃん」

何しろ、白鳥麗子を気取っていたのだから、他人のために何かをするということは、少なくとも高校時代の由希子を知る人には想像すらできない。

友人たちがびびくりしたのは料理だけではない。着るものの趣味ががらりと変わった。それまで、とにかく町中で人目を引くような派手なファッションを好んでいた由希子が、茂隆と交際を始めてからきわめて地味になったのだ。

「だって、しーくんはいつもGパンだし、わたしが派手派手じゃあ合わないでしょ」

Gパン姿など、これも高校時代の由希子を知る友人には、とても信じられない出来事なのだ。由希子の決まり文句は、いつも「ナチュラリストのしーくんに合わせているの」であった。

### ■体調悪化と喧嘩

高校の同級生の結婚式が、六月十三日におこなわれた。由希子ら友人は披露宴に招かれなかったが、二次会で祝福しようということで、同級生らが豊田市のショットバ

ーに集まった。

途中から、耳の痛みが激しくなった。ちょうど、ニュージーランドで病気が見つかる前に、耳鳴りがしたときとそっくりの状態だった。その場にずっといるのが耐えられなくなつて、由希子は茂隆に迎えに来てもらった。

茂隆がやってきたときには、ほとんど耳が聞こえなくなっていたのである。

「また、悪くなつていくんじゃないかしら」

ふと不安が萌した。成人式前に退院してから、体調はまずまずだっただけに、退院から半年を経て、少しではあるけれど恐怖感を覚えた。

そのまま病院に行き、救急外来で診察を受けた。結果的には、耳掃除のしすぎで、耳かきで外耳を傷つけて外耳道炎を起こし、それが咽頭炎にまで広がって声も出なくなつたのだった。原因がわかつてみれば間抜けな話だが、てっきり急性転化の前触れかとおののいたのである。

そんな不安に包まれた矢先、高崎直之から電話がかかってきた。十六日のことである。

「どちらさまでしょうか？」

本当に、直之の存在は忘れていたのだ。話してみれば、直之は変わらぬ調子だつ

た。でも、この日は自衛隊での講演で千葉県木更津へ向かうため、午後の新幹線に大谷貴子と乗ることになっていた。一時間ほどで切ったが、直之が「会いたい」と言うのである。

このころの由希子には、好きな相手といえば、茂隆しかいない。茂隆一筋の由希子ではあったのだが、このところ疎遠だった存在とはいえ直之のことは気懸かりでもあった。

この前に会ったのは、血小板輸血をしてもらったときだから、もう八カ月近く前になる。会いたい。懐かしい声に接してみると、無性に会いたくなる。とくに、三日前に体調を崩して不安な気持ちになっていただけに、会えるうちに会っておきたいと思う。

多少はルンルン気分になっていたかもしれない。木更津に着いて夜に入ってから茂隆に電話した。心の広い茂隆のことだから、まさか駄目とは言わないだろう。

「なおくんから電話があつてさあ、会おうということになったの。いいでしょ？」

由希子が嬉しそうに話すのが、気に入らなかつたらしい。

「ぼくは、そういうのはいやだな」

「ダメだって言われても、わたし行っちゃうもん」

由希子はタカをくくっていた。しかし、茂隆も頑強だった。電話ではラチがあかない。自衛隊での講演が翌日だったから、とにかく岡崎へ帰ってからゆっくり話し合おうということになった。

由希子は、まさか茂隆が強硬に反対するとは思っていなかった。反対されるとわかっていたら、だれが言うものか。言ってしまったからには、言葉が消えるものではない。これ以上、茂隆には告げずに直之に会おうと考えた。

でも、どうして直之に会いたくなつたかという気持ちだけは、きちんと説明しておきたい。

「こんな病気になつてしまつて、本当にいつ死んでしまふかわからない状態だから、なんでも先に延ばすことができないの。明日があるかどうかもわからないから、今日のうちにできることは、やっておきたいし、会いたい人にも会っておきたいのよ」

正直な気持ちだった。

「半年も付き合つて、そういう由希子のこと、ちつともわかつてなかつた。すまん」

茂隆は、そう言ってくれた。

「もういいの、わたし会いに行かないわ」

本心とは違うことを言って、茂隆には悪いなと思った。だが、こうなるまでの数日間というもの、ぐちゃぐちゃの喧嘩だったから、これでいいだろうと考えたのである。

『しくんは、今はもう『行ってこいよ』って、本当に言えると言ってくれる。でも、行けばやっぱりしくんはショックやと思うし、行かないでいたら私に何かあったとき、合わせてやれば良かったと自分を責めると思う。私は、しくんには悪いけど会いたい。今、こういう考え方の私がいるのは、なおくんと出会ったことが、とても関係してくると思うし、もう別に好きじゃなくて、ただの友達だと思ってるから、会っても絶対大丈夫やと思ってるんだ。だから、内緒で会いに行こうと思ってる。内緒って悪いかもしれないけど、しくんのこと考えると内緒で行くのが一番のような気がして……』

(6月19日、赤星理香へ)

直之とは、岡崎市内をドライブした。これが、二人が出会った最後になる。由希子は数日後、会ったことを茂隆に告げた。

### ■病院実習と帰省

由希子の自宅にも出入り自由になっていた茂隆だから、二人が会わない日というのはそうないのだが、たまに会えない日でも電話だけは欠かさなかった。由希子がつらさを味わったのは、茂隆が愛知県内の病院へ実習に通っていた六月と七月の二カ月間だ。

やはり、じかに本人を目の前にしてしゃべっているほうが、気分が落ち着く。しかし、病院実習は大事なカリキュラムだから、彼の時間をつぶすわけにもいかない。かろうじて助かったのは、この時期にテレビの取材や講演などがかなり入っていたことだ。まるまる暇だったら、無理にでも実習中の病院に押しかけたかもしれない。

この実習で茂隆は、名古屋市内の病院に勤務できるかどうかの感触を探っていた。専門学校の三年生ともなれば、実習に加えて就職試験に備えなければならぬ。しかし、名古屋を含む愛知にすべきか、故郷の大分にしたほうがいいのか、茂隆の気持ちは容易に決まらなかった。

「迷っているのなら、帰ってくることをね」

一番上の姉は、電話で相談を持ちかけた茂隆にそう言った。七つも年の離れた姉は、

もう一人の母といった感じなのだが、かといって姉の助言に素直に従う気持ちにもなれない。結論は先送りになった。

茂隆が帰省したのは八月十一日のことだった。二十六日まで岡崎を離れていたが、このときも由希子は寂しい思いをした。茂隆が実際に大分の実家に到着するのは十五日で、それまでは「四国横断帰省ツアー」としやれ込んで、バイクをずっと走らせるのだ。予定表をポストに入れていってくれたが、電話は愛媛入りの十三日と大分到着の十五日にしかかけてくれない。電話がなければ、さっそく手紙だ。

《妹が封筒を見て、字がきれいだねって誉めてたよ。お母さんは切手の絵を見て受けてたよ。おちやめさんね。それにしても、'92四国横断帰省ツアー》  
 なんて勝手に題まで付けて、やってくれるじゃない。オモシロイぞー。Big News!! さっき大谷さんからEメールあつてね、なんとっ!! 日本で移植できることになったんだよ。やったね。日赤だったらしくくん、お見舞いに来てくれるよね?》(8月11日)

日本での移植実現のニュースは、真っ先に茂隆に伝えたいところだったが、どこを走っているかわからないから電話のしようがない。

《やっと返くれたね。全然なくってちよつとプリプリ状態だったのよ。まあEの声で分かったと思うけど。今日、沢山の人に手紙を書いたので、本当はもう字を書くのイヤな状態。勉強もしてないのになぜ指にタコができていいのか不思議がられるけど……。それにしてもハガキを送ってくれそうなので、楽しみです。毎朝ポストに行かなきゃっ。あつ、でも郵便物は昼ごろ届くんだから、早起きしても仕方ないね。先日病院での結果が良かったので、今度は2weeks afterです。やったあ。それじゃあ、楽しく帰っておくれだバィ》(8月14日)

茂隆からの絵葉書は、香川県琴平からと、高知市からののがその後届いた。

大分の実家に帰った茂隆は、家族にきつぱり告げてくれた。  
 「ばく、名古屋のほうで就職しようと思う」

由希子の移植が、名古屋の病院で実施されることになったと、十三日の電話で聞かされたときに決断していた。名古屋方面で就職できそうな見通しも、病院実習のときにほぼつけていた。母は泣き出した。地元の高校時代も、三年間ずっと下宿暮らしだったし、男の子は茂隆だけだったから、就職のときくらいは地元に戻ってくれるだろうと、それだけを願っていたのである。二番目の姉はそうかたくなな意見ではなかつ

た。

「帰ってきてほしいと思うけど、でも、あなたの人生だもんね。やりたいようにやればいいじゃないの」

父は黙っていた。その場では、結論が出なかった。

おまかな内容を伝えられた由希子は、茂隆との交際すら禁じられてしまいそうだと悲観した。

《註》してからまた寝てしまった私です。今、夜中の3時。生活を変えなければ本当にいけないわ。しーくんの家族、やっぱり私と付き合おうの賛成じゃないね。きつとどこの親でも反対するよ。それで、しーくんも仕方ないと思って、別れる事になっても、それはそれで割り切ろうね、と大谷さんが言っていた。お母さんも同じことを言っていた。頭では分かっても、実際そう言ったらきつと辛いだろうけど、これも白血病の副作用として受け止めなきゃいけない事なんだろうな、と思っっています。白血病になったことを恨んでも仕方ないと言いついて来たけれど、しーくんと別れる事になったら、きつとどうしても白血病になったことを恨まずにはいられないだろうな。あ、でも病院で初めて会ったんだから感謝しなくちゃいけないかな。まあ、今から

こんな事を心配しても辛いなので、そうなるから考えるようにしよう！》(8月17日)

茂隆が、愛知に帰る日が近づいてきた。

「帰日もバイクだもんね。こんな宙ぶらりんの精神状態だったら、事故起こすかもしれないなあ」

緑側でつぶやいたら、横にいた父がぶっきらぼうに言い出した。

「男つてのはなあ、好きな女ができると夢中になるもんだが、そんなのハシカみたいなものよ。でもいいさ、おまえのやりたいようにやれや。母ちゃんにはおれからよく言っておく」

十年後くらいに戻ってくれば良いという。これで決まりだった。あとは、病院の就職試験に合格できるよう頑張るだけだ。

茂隆は八月二十六日、岡崎に帰ってきた。



茂隆の決意を聞いて安心した由希子は、神戸旅行のスケジュールづくりにいそしんだ。初めての一泊旅行に、由希子は胸をふくらませて、旅行雑誌を広げた。

ところが出発間近の九月一日になって、右の首筋のリンパ腺が腫れた。痛みはないが、触ってみるとコリコリツツという感じがする。八月の末あたりから、それまではなかった昼間の発熱に気づいてもいたので、心配になった。

神戸へ向かう三日、病院で診てもらった。一泊二日の旅行なら大丈夫だという診断だったので、予定どおり十時過ぎの新幹線に乗った。新神戸で下車して、ホテルでチェックインするため、バスを利用した。遠方からやってきた女の子たちで車内は混んでいた。近くに住んでいるらしい母娘が降車ボタンを押すのに難渋しているので、由希子が代わりに押した。

「あら、中堀さんじゃありませんか。先日のテレビ見ましたよ。頑張ってくださいね」

由希子と茂隆は、顔を見合わせた。

「こりやあ、神戸だからって下手なことできんぞー」

しかし、体調はよくならず、チェックインしたまま、ホテルでしばらく横になっていた。一向に回復に向かわず、結局この日はずっと休んでいた。

それだけに、気分よくなった翌日も、あまり無理をしないことに決めた。どうしても必要な買い物を済ませたほかは、あちこち歩くことをやめて、新神戸駅の西側を散策する程度にした。

そんななかで、北野のハリウッド・スターウェイだけは忘れなかった。ここで、ウエディングドレスをまとうのが、由希子にとっては神戸旅行の最大の目的といってもよかった。

《結婚、みんなあんまり早くしないです。私は困るよ。だって、きつと私結婚できないもん。でも今度、神戸行ったらウエディングドレス着て写真撮ってくるんだ。ウエディングドレスを結婚前に着ると、お嫁に行くの遅くなるっていうけど、本当にどうせ遅くなるか、できないんだったら、着ちやうもくん。それで自分で写真見て、結婚した気分を味わうの。もうほとんど離婚したバツイチの女の状態。若いうちだけよ、ドレスが似合うのは。でもね実は私、本当はすごい結婚にあこがれてたんだ。子供はキライだって皆に言うてるけど、やっぱり自分の子だったらかわいいと思うし、ひそかに子供が生

まれたら何て名前にしようかな」と思っていたのであります。まあ皆がお母さんになっても、私はお母さんにはなれないので、皆の子供には「オバさん」とは呼ばせないぞ。「コラッ！ お姉ちゃんと言いなさい！」としつけましようね。皆がお母さんになって、自分だけなれないショックで人形をだつこしたり、おんぶしてたらどうしよう。怖いわ〜（8月17日、久保由紀子）

結婚式で純白のドレスをまとうのが、由希子の長年の夢であった。留学中にホストの結婚写真を見せてもらったときも、強くそう思った。ホストマザーは薄緑のドレス姿だったが、それを見ながら、純白のドレスにユリの花のブーケを持った由希子自身の姿を想像したのもだった。

本当は、茂隆にも燕尾服を着てもらいたかった。燕尾服がなければ、黒の礼服でもいい。彼と二人そろった「結婚写真」が撮れるなら、実際に結婚できなくても幸せだと思った。しかし、長身の茂隆に合う服は置いてなかった。仕方なく、由希子だけが、冷房の効いていない部屋で、汗を流しながらウエディングドレスを着たのである。

首の腫瘍しゅようはやはり、たちがよくなかった。九月二十一日の診断で、二十四日に入院

するよう告げられたのだ。三日しか余裕がない。急な入院とあって、由希子は茂隆にいらだちを見せた。移植に対する恐怖感があるのだろうか、茂隆は理解しているようだった。

しかし土壇場になって、由希子は茂隆に「自立宣言」をした。

「しっかりしなきゃいけないとは、ずっと自分の中ではわかってたの。それなのに、しーくんには荷物を持たせたり、送ってってくれと言ったり、ずっと甘えん坊だったのよね。でも、無菌室の中ではなんでも自分でしなきゃいけないんだから、本当に自立しないと、何もできなくなっちゃう。けど、心配しないで、わたし、ちゃんと自立するから」

自立宣言の背景には、茂隆の就職試験がある。名古屋市内の病院での一次試験に合格し、入院当日の二十四日に面接が予定されていた。同じ日に入院することに、由希子は何かしら因縁といったものを感じたのである。

大分に帰らず、こっちに残ってくれる意志をはっきり示した彼のために、わたしもそれにこたえられるよう頑張らなくてはいけない……。由希子はそう決意した。

## ■妹、そして年下の親友

たった一人の妹の久美子とは、小さいころからしょっちゅう口喧嘩をしていたのに、病気になるから気になる存在に変わった。

久美子に対する由希子の罵声は、決まって「ブス」「デブ」であった。体も由希子のほうが大きいから、勝つのはいつも由希子のほうであった。

「そんなの、どこの家でもあることだよ」

そう言っただけでくれるのは、祖母の筒井つづいきくゑだ。末っ子の知香子をはじめ子どもが六人で、孫が十一人もいるから、孫同士のきょうだい喧嘩はしょっちゅう見ている。

だから、久美子が泣きだしたりして母に叱られると、由希子はすぐ、おばあちゃんのところへ逃げ込んでしまうのだった。

このままの状態がいつまでつづくのか心配した母に、あるとき諫められた。

「そんなに久美子をいじめて、もし久美子がお金持ちと結婚して、あんたが貧乏なんかしたら、久美子の世話にならんといかんのよ。もうちょっと、やさしくしてやったらどうなの」

そんなことなら、心配は無用だった。

「わたし、お金のない人となんか、結婚しないもん。心配いらないわ」

由希子は、しらっと言っただけ。

それなのに、洋服を買うときに限っては、久美子のためにコーディネートを務めた。ファッションのセンスはあったから、その能力が発揮できる場では優しくなれるのである。

由希子が卒業した年に、久美子も光ヶ丘女子高校に進学し、茶道部に入った。久美子への対応がやや変化しかけたのは、ニュージールランドでの留学中だった。手紙のやりとりをしながら、妹を見る目も少しは違ってきたのである。

しかし、帰国の理由が白血病の発病であったため、入院を経て自宅に帰ってからは、以前のような関係に戻ってしまった。病気を理由に、なんでも久美子にやらせようとしたのである。

「お茶入れてよ。わたし白血病なんだから」

そんな経過があったので、久美子が腹に据えかねて、親族の中にHLA適合のドナードナーがないことをばらしてしまったのだ。

そうした姉妹間の確執が、まるで最初からなかったように消え去ってしまったのが、

再入院を終えて成人式前に退院してからである。

久美子に対して、目に見えて優しくなった。プスだのデブだのと、あまり口にしなくなつたのである。口喧嘩が絶えた。

「久美子の性格は好きだよ」

評価する言葉を使うようになっていた。由希子がそうなれば、久美子のほうも、過去の憎らしい姉という見方が変化していく。

講演の前夜に、どういうふうに語ればいいのかと、由希子が準備を重ねているところへ、自然な形で日本茶を運んでくるようになっていた。

「医療秘書になろうと思うんだけど、どうかなあ」

高校を卒業したあとの進路について、久美子が相談を持ちかけてきた。姉が病気になるってなければ、考えられないことだったろう。

「それって、とってもいいよ。久美子ならできると思うな」

ごく自然な形で、由希子は久美子の考え方に賛同していた。

岐阜県多治見市の遠藤実希子は、由希子より学年が一つ下である。二人が会つたのはわずか一回しかない。それなのに由希子は、普通なら隠しておくはずの微妙なプラ

イバシーすら、実希子に手紙で打ち明けている。

実希子との出会いは、八八年七月のロッテCMオーディションだった。東海北陸地区予選が名古屋市内でおこなわれたとき、参加者の中に、そのころ高校一年生の実希子がいた。審査が始まる前の待ち時間、実希子のほうから話しかけてきた。同級生に似ていたからだという。

由希子はその直後、ニュージーランドの短期ホームステイに出かけたが、帰国してオーディションの最終選考をテレビで知って、実希子にハガキを出した。

《ロッテCMの二十名決定のヤツ見た？ 桐山麗子ちゃんを見て、私が実希ちゃんにさ「あの子の肌すごいきれいー」って言ったの覚えてる？ 目とか外人っぽかったよネ。でも私は中江幸恵って子の顔がすごい印象的でいいと思うけど、化粧ばえしそうとかいろいろあるし……。一体誰が選ばれるのかや——。早く決まれよっ——》

ここに出てくる「中江幸恵」とは、のちに女優となる中江有里の本名である。

実希子との関係は、十七歳になる直前に手紙を出してから、しばらく途絶えてしまった。久しぶりの手紙は三年生になってからだ。

《来年の今ごろは、実希ちゃんにはNew Zealandに手紙を出してもらおうこと

になって、切手代が高くなるね。私の卒業後の進路は、予定では大学を受けて一年休学ということにして留学して、戻ってきたら大学生やるの。英語ペラペラになりたいんだ。今はすごく英語の成績悪いけど……。あのね、鈴木由美子って人の「白鳥麗子でございます」ってマンガ読んだことある？ すごく面白いからぜひ読んでほしいです。私も麗子さんのように美人だったらなあとつくづく思ってしまう。あ、私、実希ちゃん顔忘れてきちゃったので、写真ちょうだい。私のも、いらないだろうけど、入れておくわ》(89年6月18日)

予告どおり、次の手紙はニュージージーランドからになった。ほぼ一年ぶりだけに、便箋四枚も書いてしまった。

実希子も高校三年となって、大学進学を目指していたから、ついつい手紙を書くのを先送りしているうちに、由希子の発病から帰国となったのである。

実希子が病院に見舞いにやって来たとき聞いたのは、一回目の退院を経て通院しているときなので、会えずじまいになった。実希子は愛知淑徳大学に合格していた。

《退院したのは一月二十八日から、もう二カ月近くになりますね。二カ月間、一度も熱が出ず好調です。今は very ショートで男の子みたいです。昨

日も中三のクラス会があって、夜中の二時まで遊んでしまったの。病人なのにねー。今の状態が長く続いたら、秋に車校(自動車学校)でも行こうかと

思っています》(91年3月25日)

大学生になって忙しいせいか、実希子から返事はなかなかこなかった。そうこうするうちに再び入院となる。二度目の退院直前にやっつと、年賀状を兼ねて写真同封の手紙が届いた。九二年になっていた。今年こそ再会したいものだと思う。

《写真ありがとう。やっぱ輝いていたヨ。実希子ちゃんが春休みになったら、一度会おうよ。もしよかったら岡崎まで来てよ。実希子ちゃんとはあのオーディション会場で少し話しただけに、今もこうして連絡取り合ったりして、こういうのってすごくステキだよ。うちのお母さんがいつも実希子ちゃんから手紙が来る度に、あのオーディションを受けたことは無駄じゃなかったねって言うの。私も本当にそう思うよ》(92年1月27日)

土田茂隆と交際を始めてからの手紙では、のろけまくった。

《私は毎日、自宅と彼氏の家のどちらかでゴロゴロしています。ほとんど彼の家で主婦してて、最近オバサン。だってスーパーパーのチラシが目がいってしまふもの。料理なんて学校の調理実習以外したことないのに、いつもするよ

うになって、掃除、洗濯、アイロンがけ、すっかり板についてしまった。情けない》(92年3月18日)

その後、電話のやりとりがあつて、九月二十三日に会おうということになった。知り合つてから、もう五年近い時間が経過していた。だが、入院が二十四日と決まり、ついに再会がかなわないうまになつたのである。

### ■闘病仲間の生と死

入院と退院を繰り返しているうちに、闘病仲間も増えていく。病気が治つて退院していく仲間もいれば、病院で天国に旅立つ仲間もずいぶんみえてきた。

滋賀県の陶芸家・神山賢一と知り合つたのは、二回目の入院中であつた。賢一は九〇年二月に慢性骨髄性白血病となり、九一年十月に叔母の骨髄液によって移植をしたが、九二年四月二十一日、三十一歳で亡くなつた。死去を知らされたのは、初めての講演のために福島県郡山へ向かう車中であつた。

《あんなに順調のように見えていたのに再発していったなんて……。全く知り

ませんでした。でも、大谷さんからいろいろと話を聞いて、賢一さんの頑張りにも、お母さんの頑張りにも、本当に拍手を送りたい気持ちです。

この病氣になつて沢山の素敵な人と会えたことだけは本当に良かったなあと思つています。でも病氣になつたことだけは悔しくて仕方ありません。

辛い辛いと何度言つても悲しいだけになつてしまうけど、私は絶対頑張つて病氣に勝ちたい。賢一さんや磯さんの分まで頑張りたい。お母さんはぜひ賢一さんの分まで長生きして下さい。私には上手な慰めの言葉が見つからないけれど、賢一さんと出会えた事は一生忘れません》(92年5月10日、神山清子へ)

葬儀には出られなかったが、由希子を感動させたのは、賢一が献体を果たしたことだつた。滋賀医科大学に預けられた賢一は、二年後の九四年五月に母の清子のもとに帰つてくると聞かされた。

「わたしも、賢一さんを見習いたいわ。もしものことがあれば、献体だけでなく、献眼をしてもいい」

母の知香子に、希望を伝えた。そのころは、ドナーが見つかるかどうか雲の中にいる時期である。病状がどうなるかわからず、やがて不幸な転帰をたどらないとも限ら

ない。両親は、神山の自宅を訪れて、母の清子に献体について聞いてきた。

退院後も文通を交わしたのは、磯和夫を紹介してくれた丸井和子である。

《最近、大谷さんと一緒にいろんな所へ行ってます。大谷さんがとても私を可愛がってくれていて、とても嬉しい。でも、いつもすごいハードスケジュールで、毎日こんなので大丈夫かなと思える程、彼女のパワーはすごい。彼女と出会ってから、本当に沢山の人の出会いました。毎日が充実してるってかんじです。絶対、病氣治して、それからでも勉強して、骨髄移植のカウンセラーとかになりたいなあって、今は思っています。結婚してみたいけど、子供が産めないような嫁はいらないって思われそうだから、結婚とか友達が話をする時、ちょっと辛い。でも分かってくれる人も絶対いるからいいんだ》(92年5月11日)

「分かってくれる人」が茂隆であることは、いうまでもない。

《丸井さんのインターフェロンはまだ続けているのね。効いてるんだ。それにしても熱が出るなんてね。まあ私も二、三週間に一度、フィルデシンという注射をしています。白血球コントロールよ。今の治療法は6-MPというも

のらしくて、バイキンを殺す数々の薬と白血球上昇を抑えるロイケリン散さんという粉薬の投与で、落ち着いて(?)います。

ここ二週間程、熱が出てます。きつと疲れてんだろうな。毎日忙しいけど、これからは移植に向けて体大切にしないと。それにしても移植こわいよ。ドナーが見つかって本当に良かったけど、やっぱり怖いというのは本音でも、このままずっと元気でいられるかと考えると、やっぱり移植にかけてみるしかないもん。それにアメリカでドナーが見つかって、やっぱり私のHLAと同じ人がいたんだ!!と思うと嬉しいし、磯さんが作ってくれたチャンスだもん。絶対治して大谷さんのように頑張りたい。

丸井さんにも早くドナーが見つかるといいね。丸井さんのHLAって、そんなに珍しいの?でも珍しくても、世界中に同じ人はいる筈だから諦めな  
いで頑張って探したい》(8月17日)

薬品名は、友達には理解不能だろうから書かないが、患者同士だと平気で書ける。

《病氣になってから、もう二年。本当にいろいろな人に会ったね。それに丸井さんが言っていたように、失ったものもたくさんあったけど、得たものもたくさんあった。初めは死ぬかと思ってなかったけど、途中何度も自分が生

き続けられるかとか、その他のことで不安になったり、気が狂いそうになったりしたりけど、バンクの活動をして、いろんなこと知って、勉強して、今では前より元気になったと思う。白血病になったことも、苦しくて「何で私か！」って何度も思ったけど、治ってしまえばすべてが良かったこととして、受け入れられると思う。治らなかつたら悔しいし、白血病なんか、たかがバク菌のようなもののくせに、そんなのに負けられないわ。でも、人間って、生きてるってことは、死に一步一步近づいているんだよ↑友達に言われた」

(9月15日)

小さな闘病仲間とも仲良くなった。

「失礼ですが、お姉さんは白血病でしょうか」

二回目に入院したとき、そんなことを言って由希子を驚かせたのは、川崎市からやってきた高橋悠<sup>たかはしゆう</sup>だった。小学校一年生だという。

「そうよ。坊やも白血病？」

病院が告知をしない原則は変わっていないかったが、幼くてもはつきり口に出す子はいらんだ。

「ぼくは、重症再生不良性貧血なんだよ」

由希子は、すぐに悠の母・真知子<sup>まちこ</sup>と親しくなった。菅平セミナー直前に、自衛隊久里浜駐屯地での講演を、真知子に肩代わりしてもらったこともある。移植のために骨髓移植センターに入院したときも、少し前に悠が入院してきていた。その折に、真知子からびつくりするような話を次々に聞かされることになる。

悠は、九〇年二月の発病時は重症再生不良性貧血だったのだが、その後、骨髓異形成症候群を経て、白血病に移行していた。治療をつづけながら、ドナーがあらわれるのを待っている時期だった。父の照雄<sup>てるお</sup>と母の真知子は、二人そろって東海骨髓バンクのドナーとなって、見ず知らずの患者に骨髓液を提供した経験を持っていた。

「ご両親がドナーになれたんですもの、悠ちゃんにも見つかりますよ」

慰めではなくそう思った。悠のHLAもポピュラーだろうと考えるからだ。

確かに、悠には日本骨髓バンクの登録者の中からドナーが見つかった。由希子が亡くなってからのことになるが、九三年二月に移植を受けることができた。しかし、再発してしまい、再移植の準備が始まった矢先の九三年十二月に急死したのである。

由希子より少し前に移植を受けたのが、横浜からやってきた高品亮介<sup>たかしなりやうすけ</sup>だ。そのとき中学一年生である。亮介の場合、ドナーは東海骨髓バンクの中から見つかった。それ



に亮介は発病したのがアメリカだったので、病気のことも知っていた。外国で発病したという、わずかな共通点ではあっても、患者同士には深いつながりがあるように感じられるものなのである。部屋は違っても、亮介は慕ってくれたし、由希子も声をかけることを忘れなかった。

そう長くはない会話で、必ず出るのが食べ物の話題だった。

「退院したら、おいしいものを食べに行こうよ。それには、早く元気にならなくちゃいけないけど、いろんなことやろうね」

亮介は九三年三月に退院して、二学期から中学二年の普通学級に通い始めた。

### ■高校の募金活動

骨髄移植推進財団の啓発ビデオの収録も経験し、東京でのシンポジウムを聴いた由希子は、光ヶ丘女子高等学校のシスター・アンジェラ森りつ子に手紙を出した。シスターは高校の三年間、由希子の学年主任を務めたほか、一年生と二年生のときに宗教の授業を担当していた。

由希子は広くドナー募集の活動をする一環として、学校への協力を頼むこととしたのである。シスターへの手紙は、レポート用紙四枚もの長文になった。

《こんにちは。長くお便りせずにてすみません。もう、この病気になって二年目、どうしても早くドナーを見つけないのです。急性転化する前に移植をしなければ、私を待つのは死だけなのです。移植をするからといって、必ずしも治るとは限りません。もう今の時点で子どもを産むこともできないと言われていますし、移植後、いろいろな合併症に悩まされることもたくさんです。手が動かなくなったり、目、耳が、見えにくい、聞こえにくいということもあるそうです。それでも私は移植を受けたい。

時々、人間はなぜそうまでして生きようと考えるのかなどと考えてしまうこともあります。でも、私は病気になって辛いことも経験したけれど、生きるといふことの素晴らしさも知りました。移植をして助かったらこういう病気で苦しんでいる人を助けるために働きたいと思っています。

病院に入って何人もの同じ病気で天に召されていた人を見ってきました。辛かった。つい三日前まで元気だった人が、私が外泊から戻ってきたら亡くなっていたり……。私なんかより一生懸命生きていたと実感できるほどの人

でした。私は絶対その人の分も生きたいし、ほかの人にも、これ以上同じ悲しみを持たないようにするため、どうしても生きたい。治る方法があるのだから。泣いてばかりいても治らない。

生きるということが、これほど大変なこととは今まで思ってもいみませんでした。本当に人は一人では生きられないものなんですね。私は光ヶ丘に通ってよかった。告知にも耐えられたし、強いと自分自身のことを言われると、

光ヶ丘で勉強したからと思えます》(92年2月25日)

そのころ、久美子が二年生に在学中だったから、シスターは久美子を通じて来校するように伝えてきた。そこで、二月二十八日に卒業以来の学校訪問が実現した。

「教職員に直接ドナー登録を呼びかけてはどうかしら。中堀さんが話せば、先生方の中で骨髓バンクへ登録する人もいると思うのよ」

シスターが提案してくれた。願ってもないことだ。

「わたしだけじゃなくて、大谷貴子さんも一緒に来ていいですか」

「それも含めて、校長先生にお願いしてみましよう」

話ほとんどん拍子に進み、三月十八日の職員会議の前に、学校が十分ほどの時間を提供してくれた。

「私には、もう残されている時間がわずかなんです……」

時間のなさを考えると、涙がついあふれてしまう。貴子の話と合わせて、さっそく何人かの教職員が骨髓バンクに登録した。

夏になって、由希子が出演したテレビを見た同級生の森実仁子もりざねひとこが、シスターに連絡をとって「同窓生として何かをしたい」と申し入れた。

仁子の長女は、六月に生まれたばかりで熱を出し、四日間保育器に入れられた。母としてのせつない経験をした直後に、由希子のドナーが見つかったことを知って、少しでも力になれたらと立ち上がったのである。

「じゃあ、とりあえず三百人の同期生に、骨髓移植推進財団のパンフレットを送りましょうよ」

封筒のあて名書きには、由希子も協力した。

「わたしって、授業のときのディスカッションでは、告知に賛成だったのよね」

三年生の宗教の時間で「生命の尊さ」を学んだとき、ガン告知やターミナル・ケア、ホスピスなどが取り上げられたのを、由希子ははっきり思い出す。ディスカッションやレポートで、由希子は「告知はすべきだ」という考え方を打ち出していた。

「あの学習をしていたから、すぐためになったのよ」

それにしても、シスターや森実仁子らは、由希子の明るさが、高校時代とちつとも変わっていないことにびつくりしていた。

こうした下地があったから、由希子が移植のために入院したとき、光ヶ丘女子高校の中でたちまち支援態勢ができた。カンパと血小板輸血のための献血を、同窓生や在校生の父母に呼びかけることになったのである。由希子の自筆の文章もコピーされて、関係者に配布された。

《日本では、九割の患者は自分が白血病であることを知らず、別の病名を教えられていきます。私の場合たまたまニュージールランドで病気が分かり、その場で白血病だと告知されました。テレビなどに出て、自分が白血病だと言うのは初めはとても抵抗がありました。でも、提供者を募るためには、患者自身が訴えるのが一番説得力があり、また一番自然なかたちだと思います。

白血病になって、周りの人にたくさん心配をかけ、励ましていただいたりして、心苦しく思うと同時に大変感謝しています。白血病になって失ったものも多かったけれど、得たものも本当にたくさんありました。移植が成功して、また再び健康を取り戻せたら、すべてが受け入れられると思っています。

す。

提供者を見つけられず亡くなっていった人を、私は何人も見てきました。私の知っている患者さんだけでも、提供者が見つからず苦しんでいる人が、今もたくさんいます。治る方法があるのに、提供者が見つからないという苦しみは、言葉では言い表すことのできないほどです。提供者がいるかないかで、明暗が分かれてしまうのです。一人でも多くの患者さんが救われるように、生きるチャンスを得られるようにという気持ちで、私は病気が治ってからもずっとこの仕事にかかわっていきたくて思っています。パンフレットを読んで、自分の骨髓液を提供してもいいと思った方は、ぜひ骨髓バンクに登録してください。もしかしたら、あなたが誰かを救えるかもしれません》

移植直前には、百万円を超すカンパが集まった。その後の分も合わせると、総額百六十万円になった。せっかくの浄財に税金がかかってはと、岡本校長はわざわざ岡崎税務署に問い合わせ、そうした心配がないことを確かめる周到ぶりであった。

このような態勢が大人のあいだにできたことあつては、在校生も黙ってはいられない。生徒会長の山森奈美を先頭に、由希子を励まそうと折り鶴を全校生徒に折ってもらうことにし、同時に激励の手紙や寄せ書きを募った。



す。

提供者を見つけれず亡くなっていった人を、私は何人も見てきました。私の知っている患者さんだけでも、提供者が見つからず苦しんでいる人が、今もたくさんいます。治る方法があるのに、提供者が見つからないという苦しみは、言葉では言い表すことのできないほどです。提供者がいるかないにかで、明暗が分かれてしまうのです。一人でも多くの患者さんが救われるように、生きるチャンスを得られるようにという気持ちで、私は病気が治ってからもずっとこの仕事にかかわっていきたいと思っています。パンフレットを読んで、自分の骨髄液を提供してもいいと思っただ方は、ぜひ骨髄バンクに登録してください。もしかしら、あなたが誰かを救えるかもしれません」

移植直前には、百万円を超すカンパが集まった。その後の分も合わせると、総額百六十万円になった。せっかくの浄財に税金がかかっていると、岡本校長はわざわざ岡崎税務署に問い合わせ、そうした心配がないことを確かめる周到ぶりであった。

このような態勢が大人のあいだにできたとあっては、在校生も黙ってはいられない。生徒会長の山森奈美<sup>やまもりなみ</sup>を先頭に、由希子を励まそうと折り鶴を全校生徒に折ってもらうことにし、同時に激励の手紙や寄せ書きを募った。